

小鳥を捕えても益鳥…？

ワシ、タカ、フクロウ、ミミズクのように主としてトリやケモノを捕えて食べるものを猛きん(禽)類といいます。

猛きん類は、性質が荒々しい肉食の鳥…と辞書にあるように、その姿や、小鳥やケモノを襲い、するどいくちばしで皮をひきさく動作などから、

人々におそろしいという印象を与えます。アメリカやヨーロッパでは、ワシタカ類を猛きん、

フクロウ類を夜の猛きんと呼び、

とくに一般のトリ類の害敵と見なす傾向にありましたが、

くわしい調査によって、畑を荒らす有害なノウサギやノネズミなどをたくさん食べる、きわめて

有益なトリ——たとえば彼らが小鳥を捕えても

益鳥だということがわかっています。

ワシタカ、フクロウの食物

日本にいる3種のワシのうち、海岸の近くにすむオオワシ、

オジロワシの主食は魚で、ときにカモノ類や

ウミガラス類を食べます。イヌワシは内陸にすみ、

ノウサギが主食で、宮城県の前山では、

ヒナが巣の中にいた2ヶ月ほどの間に、100羽のノウサギを

運んだ記録があります。

大形のクマタカもノウサギが主食で、ときどき

キジやヤマドリを捕えます。中形・小形のタカ類は、

ノネズミ、バッタ、小鳥などを食べ、

そしてハイタカは、その主食のほとんどが小鳥です。

フクロウや中形のミミズクの主食はノネズミ。小形のミミズク類は

セミ、バッタ、コガネムシなど大形の昆虫を食べます。

このような大形の昆虫は小鳥が食べにくいので、

その欠点をおぎなって害虫を除く効果が大いなのです。

猛きんの多いところには野鳥も多い

さて、猛きん類——とくにタカ類が「小鳥を食べても益鳥」なのは、

彼らの捕える小鳥が①病弱や欠かんのあるもの

②弱っているもの③群れから離れ行動力の弱いもの、など、

小鳥たちの種の保存にあまり役に立たないものが多いということ、

そして、環境に対してふえすぎたものを適当の数に調整する、

という効果のあることが、

調査によってわかってきたからです。

つまり猛きん類は、警戒心のない弱いものをなくして、

健全な小鳥社会をつくる働きがある、といえます。

ドイツでは彼らを保健警察と呼び、

保護区の中でとくに大切にしているのも、

猛きん類の多いところには、強くて健康な小鳥が育つ

ということの効果を知っているからなのです。

最近、日本だけでなく、世界の猛きん類が

減っていきつつあります。

国際鳥類保護会議が、タカ類を保護しようと

各国の政府に申し入れているのは、

いままでお話ししたように、猛きん類が

自然のバランスの一環として

欠くことのできない重要なものだからです。



愛鳥の心が育てるよい環境
日本鳥類保護連盟
サントリー株式会社

●この広告は、財団法人日本鳥類保護連盟の指導を得て、サントリー株式会社がシリーズとして制作するものです。



野ウサギを運ぶ イヌワシ

オオルリ

オオルリを遠く
ハイタカ

益鳥をを襲つる益鳥